

- 問一 幼稚園のお母さんたちに好奇の目で見られて不快な上に、そのお母さんたちの間で夫が人気者になっていることがおもしろくない。
- 問二 夫婦は対等であるはずなのに、無職で収入のない夫に向かって、旅費を工面することに恩着せがましい言い方をしてしまった点。
- 問三 家事も育児も苦手で、自分の収入が家族を支えているという自負もなくなり、万事優秀だったはずの自分が、家族にとっては卵焼きひとつ満足に作れない無用の存在に思われたから。
- 問四 絵が売れて夫が忙しくなり、苦手な家事と育児の負担を負うことを恐れていた。けれども、卵焼きには四角いフライパンが適しているように、それぞれの人が持つ得意な分野をがんばればいいとさとされて不安が消え、夫の成功を素直に願う気持ちの余裕が生まれた。
- 問一 見事に・しまい
- 問二 (たしかに) 売れた個数は大西社員の方が多く、そのすべてを売り切っている。  
(しかし) 新宿支店は18時で品切れとなり、閉店までの1時間、お客さんは弁当を買えなかった。  
(一方) 池袋支店では弁当を買おうとしたすべてのお客さんに買ってもらうことができた。  
(したがって) お客さんに満足してもらうことができた小池社員の方が優れていると言える。
- 1 態 2 手 3 図 4 境 5 識

出典は、青山美智子「きまじめな卵焼き」(『木曜日にはココアを』〈宝島社〉所収)。

問一 「私(朝美)」は一児の母にして、バリバリ働くキャリアウーマン、いわゆるワーキングマザーです。物語は朝美が「幼稚園に拓海(息子)を迎えに行く」場面から始まります。「入園してから2年以上たつのに」お迎えが初めての朝美が「緊張しながら(幼稚園の)門をくぐる」と入園式や行事の時以外は顔を見せない朝美に向かって、拓海のお友だちのママたちから、物珍しげな視線が遠慮なく向けられます。一人の母親が声をかけてきましたが、誰なのかわからない朝美は、引きつった笑みを返すのが精一杯。朝美が拓海の母親であることが分かったママたちの一人が「パパ来ないんだー」と残念そうな声を上げるのを聞いた朝美は「なんだ、人気者なのね」と気分を害した様子で足早にその場を去ります。育児初心者朝美にとって最初の試練はママたちの不躰な視線でした。さらに、ふだん拓海の送り迎えをしている夫(輝也)がママたちの人気を集めているという、妻にしてみれば、あまりおもしろくない事実も判明したことで、朝美はますます不愉快な気分になっています。

〈解答例〉

⑥ 〈幼稚園のお母さんたちに好奇の目で見られて不快な上に〉、⑥ 〈そのお母さんたちの間で夫が人気者になっていることがおもしろくない〉。

問二 自分の絵に目を留めた京都のギャラリーのオーナーから、作品を展覧会に出展しないかと誘われた輝也は、朝美に相談します。誘いを受ければ、輝也が不在の間、朝美が拓海の幼稚園の送迎と弁当作りをすることになる。朝美は仕事があるため、返事をためらいましたが、その様子を見た輝也は、妻が京都への旅費を負担することに難色を示していると勘違いします。「交通費とかホテル代とかなら〜稼いでくれたお金は1円も使わないから」と頼み込む輝也に驚いた朝美は「そんなのいいよ。出してあげるから使いなさいよ」と、夫に向かって偉そうな言い方をしたことに気づきます。「〇〇してあげる」は相手に恩恵を施すという、言わば「上から目線」(この表現を解答に使うことは適切ではありません)のような言い方です。夫婦は対等であるべきですが、朝美は定職を持たない輝也を自分の稼ぎで養っていると思っています。「無職の夫の代わりに、自分がお金を稼いで、一家を支えているのだ」という自負が朝美に傲慢な言い方をさせてしまいました。

〈解答例〉

⑥ 〈夫婦は対等であるはずなのに、無職で収入のない夫に向かって〉、⑥ 〈旅費を工面することに恩着せがましい言い方をしてしまった〉点。

問三 次々と出来上がる「卵焼き」は、「うわー！ これ、なんていうお料理？」と拓海を興奮させてしまう力作（失敗作）でした。「なんで、なんで。卵焼きくらい満足に作れないのだろう」。朝美の目に涙が浮かびます。「子どものころから一生懸命勉強して～優秀だ優秀だと言われてきた」朝美は「大嫌いな家事と自信のない育児を輝也に一切まかせて、仕事に逃げて」いました。仕事の腕は一流でも、家庭のことは苦手。定職に就いていない輝也が「専業主夫」（仕事を持たず、家事全般をこなす夫の俗称）となることでこの問題を解決していた。けれども、輝也が京都へ出かけてしまい、苦手な家事に悪戦苦闘しているうちに、朝美は「みんながなんでもなくできることができないコンプレックス」に直面させられます。さらに、「家計を支えているという自負」によって、育児、家事を夫に任せることへの負い目から解放されていましたが、輝也が「デイトレード」で稼いでいることが明らかになり、この自負も砕け散ります。家事はだめ。育児もだめ。輝也はデイトレードで収入を得ている。「輝也にとって、拓海にとって、私がこの家にいる意味」はないのではないかという絶望的な不安が朝美の心を支配します。

＜解答例＞

⑥＜家事も育児も苦手で、自分の収入が家族を支えているという自負もなくなり、⑥＜万事優秀だったはずの自分が、家族にとっては卵焼きひとつ満足に作れない無用の存在に思われた＞から。

問四「絵が売れるようになったら」、輝也はこれまでのように「家にいてくれなく」なるかもしれない。そうなれば、家事と育児を朝美も分担してこなさなければならなくなる。朝美にとってそれは、夫の絵が評価されないように祈ってしまうほどの恐怖でした。けれども、拓海からの電話で、問題は解決の兆しが見え始めます。「卵焼きも作れないこんなダメなお母さんじゃ、拓海がかわいそうだよっ」と訴える朝美を制して、拓海は料理によってそれぞれ「合った道具」があるのだと諭します。卵焼きには「卵焼き用の四角い」フライパンが、「炒めものとか麻婆豆腐」には「丸い」フライパンがいい。朝美は「合った道具」という輝也のことばから、人にもそれぞれ向き不向きというものがあることに気づきます。家事や育児が苦手なのは悪いことではない。しかも、朝美は自分で何とかしようががんばった。輝也はそれを「素敵なお母さん」ということばで褒めることで、コンプレックスによって「ぽっかり空いてしまった」朝美の心の穴を埋め、家族にとって自分は不要なのではないかという不安から解放しました。

＜解答例＞

④＜絵が売れて夫が忙しくなり、苦手な家事と育児の負担を負うことを恐れていた>。④＜けれども、卵焼きには四角いフライパンが適しているように、それぞれの人が持つ得意な分野をがんばればいいとさとされて> ④＜不安が消え、夫の成功を素直に願う気持ちの余裕が生まれた>。

## 二

問一 弁当の発注数、売れ行きなどの数字は客観的事実です。「新宿支店ではカニ弁当は完売、池袋支店では20個の売れ残りが生じた」であれば事実を述べたことになりますが、部長は「完売」については「見事に」、「売れ残り」については「(生じ) てしまいました」という言い方をしています。「見事に」は「賞賛する」、「～てしまいました」は「残念だ」という部長個人の思いがそれぞれ反映されています。

問二 社長は弁当をたくさん売った大西社員ではなく、売れ残りを生じさせてしまった小池社員の方を高く評価すると言います。1時間ごとの売り上げ数をまとめたグラフを分析しましょう。どちらの支店も弁当が順調に売れたことが分かりますが、目立つのは新宿支店の18時から19時です。右肩上がりで推移していた売り上げ個数がとつぜん0になっています。部長は「見事に完売」と報告しましたが、実際は閉店まで1時間を残した18時の段階で「品切れ」を起こしていたわけです。18時以降、新宿支店を訪れて弁当を買おうと思ったお客さんは、売り切れで買えなかったということになる。これに対して「売れ残りが生じてしまった」池袋支店では19時の閉店まで弁当を売り続けた。新宿支店はお客さんの「弁当を買いたい」という要望に応える機会を失っていますが、池袋支店は販売機会を逃さなかった、すなわち、お客さんにきちんと満足してもらったという点で、社長は高い評価を与えたと考えられます。